

亡き母の詠める

相模原支部 鈴木 勝（子）

戦没者 鈴木 與作

戦没地 フイリピン沖

うす茶色に変色した小冊子「青山」、母千代が戦死した父の霊に捧げんと、昭和三十八年に発行したものだ。随想と短歌の中から心に残る数首を紹介して、生きていれば百二歳の母と写真でしか知らない父を偲びたい。

「はじめに」

昭和八年一月あなたのもとに嫁しづいたものの、それは十年の短い縁の糸でしかなく、あなたはあの大戦で子供と私を置いて南の海に散ってしまいました。その日からは一本の香をたくいとまも許されぬ忙しさときびしい日々でした。（中略）今ここに退職辞令を手にして、今日からはゆつくりと経も読み香もたける安らぎを覚え、新しくあなたのおそばへ坐ったような気持ちにされました。二十一回忌を迎え、青山の思い出の一つを記してあなたのご冥福をお祈りいたします。

千代

ベル悲し 旗波がくれ出征の 夫の姿は 見えつかくれつ

夢ならず 夢にあらずなと 祈りつゝ 夢なりしかも 夫の帰還は

今日よりは 大きな海原 吾子と行く われまもりませ 君がたましい

戦死せる 夫の遺骨を 迎えむと 雨の降りしく 横須賀に來し

―妹（叔母）の詠める―

波路遠く 今かえり來ぬ 白妙の み箱にそそぐ 雨一しきり

子らの為 茨の道も 越え行かん くずれんとする 心むち打ち

亡き夫を 恋しく憶う 今宵なり 遠くにきこゆる 祭りの囃子に

―三人の息子を詠む―

時雨降る 休日一日 奥にありて 一雄は囲碁の 秘手をひもとく

解禁を 前に竿の 手入れする 国雄はも早 鮎のかゝりし顔

丹沢の キャンプファイヤーに 頬を照らし 勝は唄に 酔ひつゝ居らん

うら盆会 波路はろけく 越えて来し 夫がみたまか 水色の蝶

吾が職場 最後を弾ける 鍵盤に 秋しのびよる 土曜日の午後

二十年を 通い勤めし 吾がつとめ 退職願もて 終止符をうつ

表彰状 遺影と並べ かゝげれば 笑めるがに見ゆ 愛し吾が夫 かな

待望の わが家を建つる 槌の音 祈りと夢は 今むくいらる

紙面の都合で三十頁の中のほんの一部ですが、文や歌を読む度に涙し同時に生前の母に何の孝

行もしてあげられなかった自分を悔やむ……その私も母と同じ教職の道を退いて十年、古希を迎えた。

（追）後に短歌会主宰の鈴木義人氏の詠める

歌に生き　心ゆたかな　人なりし　千代女に初春の　祈り捧ぐる